Huck から Hank へ

——"A Campaign that Failed" の重要性——

那 須 頼 雅

1

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court[1] は，英国とアメリカで，1889年に出たが，書き始められたのは，その4年も前で，*Adventures of Huckleberry Finn*[2] がアメリカで出た年，早ければ1885年12月くらいだったのではと，H. G. Baetzhold は推測している[3]．それはとりも直さず，*A Connecticut Yankee* と *Huckleberry Finn* とは，*The Adventures of Tom Sawyer* と *Huckleberry Finn* との場合同様，ほぼ連鎖的に引き続いて書き下ろされた，言わば "twin books" であったことを示している。それにも拘らず，*Huckleberry Finn* と *A Connecticut Yankee* とは，作品の性格上での断層が余りにも大きい。この2作品が同じ作家の手に成ったとはとても思えない。たしかに，いずれの作品もアメリカの南北戦争の引き金となった奴隷制度を扱ってはいるものの，その制度の扱い方が大きく違うのだ。さらに，作品の醸し出す雰囲気がまるで違う。とりわけ大きく違うのは，死または死者に対する作家 Twain の扱い方であろう。ただの一例をとってみても，Huck と Hank とでは大きく異なる。Huck は1章で，"I don't take no stock in dead people." (*H.F.*, 2) とうそぶく。9章では，漂流する難破船に男の死体を Jim が見つけ，Huck に "It's a dead man . . . doan' look at his face—it's too gashly." (*H.F.*, 61) と叫ぶ。そればかりでない。Jim はその死体にぼろ布れを被せて，Huck に見せまいとする。すると Huck は，

それに対して，"I didn't look at him at all. Jim throwed some old rags over him, but he needn't done it; I didn't want to see him." (*H.F.*, 61) と言い，死体など見るのも嫌だと言う。このように *Huckleberry Finn* では一貫して，死・死者への恐怖・忌避が打ち出されている。

ところが，*A Connectcut Yankee* の Hank の場合になると，これががらりと変わる。43章の Sand-Belt の戦で，Hank は "We will kill them all." (*C.Y.*, 397) と敵兵殲滅命令を下し，寄せ来る2万5千の敵兵を皆殺しにする。最後に Hank 自らも，死体にもたれて助けを求める敵兵に剣で刺され，瀕死の状態になる。しかしそれでも，平然と，"now all is well, all is peace, and I am happy again . . . death is nothing, let it come." (*C.Y.*, 409–410) とうそぶく。ここでの Hank には，死への恐れなど，みじんもない。死を死として恐れないふてぶてしさ，いや，死の礼賛，死への憧れさえも感じ取られるのだ。

このような Twain の "twin books" 中での意外な食い違い，Huck から Hank への大きな隔りを，われわれ読者は一体どう受け止めたらよいのだろうか？この変化のしるしは，Twain が丁度 *A Connecticut Yankee* 執筆中の1887年8月，William D. Howells に宛てた手紙の中に見出せる．

> How stunning are the changes which age makes in a man while he sleeps. When I finished Carlyle's *French Revolution* in 1871, I was a Girondin; every time I have read it since, I have read it differently—being influenced & changed, little by little, by life & environment (& Taine, & St. Simon): & now I lay the book down once more, & recognize that I am a Sansculotte!—And not a pale, characterless Sansculotte, but a Marat. Carlyle teaches no such gospel: so the change is in *me*—in my vision of the evidences.[4]

ここで意味ありげに書き留められている "The change is in *me*." という

告白は，Twain の一大脱皮，自己変革を明かすものである。そして，この原因は，Twain 自身ここで認めているように，Thomas Carlyle の *French Revolution* からの影響ではなくて，南北戦争下での若き Clemens の南部への忠誠・離反・北部への転向であると考える。この小論は，この観点から，*Huckleberry Finn* と *A Connecticut Yankee* の両作品を再評価することを目指す。それと同時に，1885年に *Century Magazine* に載った "The Private History of a Campaign that Failed"[5] の意義を考える。

2

Walt Whitman は "the real war will never get in the books." 6 と述べた。Twain も，自分の若かりし Clemens 時代，故郷ミズーリ州を救うために一度は愛郷心に燃えて立ち上がったものの，結局はその祖国を裏切ることとなった Clemens の南北戦争記録は "books" の形にはならなかった。それは僅か17頁の "The Private History of a Campaign that Failed" という小さなパンフレットの形で，真にひそやかに出された。

> You have heard from a great many people who did something in the war; is it not fair and right that you listen a little moment to one who started out to do something in it. but didn't?
>
> (*C.T.F.*, 1193)

これが，このパンフレットの書き出しである。Twain にしては実に控え目で，ひそひそ調なのに誰しも驚くであろう。それもそのはず，ここで語られる内容が日本語でむき出しにすると，「敵前逃亡秘話」とでも訳すべき内容だからである。しかも，この敵前逃亡の原因というのが，軍服でなく，平服の，若いたった一人の北軍兵士を，全員が物蔭に穏れて，狙い撃ちして射殺するという卑劣な行為のためだったというのだ。その時，Clemens は，"Marion Rangers" というミズーリ州遊撃隊の中尉であった。

He was lying on his back, with his arms abroad; his mouth was open and his chest heaving with long gasps, and his white shirt-front was all splashed with blood. The thought shot through me that I was a murderer; that I had killed a man—a man who had never done me any harm. That was the coldest sensation that ever went through my marrow. I was down by him in a moment, helpessly stroking his forehead; and I would have given anything then—my own life freely—to make him again what he had been five minutes before. (*C.T.F.*, 1205)

この自らが "murderer" で，この罪の償いのためには自らの生命すら捧げたいというほど慙愧の念に打たれ，Clemens は悩みに悩む。こうして遂に Clemens は敵前脱走を決断したと次のように言う。

My campaign was spoiled. It seemed to me that I was not righty equipped for this awful business; that war was intended for men, and I for a child's nurse. I resolved to retire from this avocation of sham soldiership while I could save some remnant of my self-respect. (*C.T.F.*, 1205)

そして，この秘話は，こう締め括られる。

I could have become a soldier myself if I had waited. I had got part of it learned; I knew more about retreating than the man that invented retreating. (*C.T.F.*, 1207)

しかし，これを逆の立場から読むと，死を恐れ，生命惜しさに敵前脱走した Clemens 中尉の卑劣さがむき出しにされている。つまり，"I was a rebel and the son of a man who owned slaves." (*C.T.F.*, 1194) という Clemens 自らの惨めな正体が，この "retereating" の特技を見事に身につけたという burlesque で特に鮮明に浮き彫りにされている。

要するに，「敵前逃亡秘話」で明らさまにされるのは，南北戦争でまるで "a rat" さながらに，こそこそ逃げ回った脱走兵 Clemens と，それとは全く逆に，燦然と武勲に輝く北軍大佐 Grant，後の Grant 将軍，とのコントラストである。これは，死を恐れに恐れ，"a rabbit" の腰抜け兵卒のまま，ついに "a soldier" になれなかった臆病な "rebel" と，死を恐れず，「三死三生」[7] の勇猛果敢な "hero" とのコントラストである。

このコントラストは，先の Huck と Hank とのコントラストにを思い出させる。引いては，*Huckleberry Finn* と *A Connecticut Yankee* との間の大きな断層が，このコントラストから説明可能になるであろう。「敵前逃亡秘話」は，読者にこのコントラストを明示するという意味で，たしかに価値がある。このことを示すためにわざわざ，Twain は，この中に，"The thoughtful will not throw this war paper of mine lightly aside as being valueless." (*C.T.F.*, 1206) の注意書きを添えている。

3

> "One of the highest satisfactions of Clemens's often supremely satisfactory life was his relation to Grant."[8]

この言葉は，Twain の文学活動全般にわたっての師匠であり，40年以上も親しく付き合った William D. Howells のものである。そして，Albert B. Paine に次ぐ Twain 伝記研究家 Justin Kaplan は，このように述べている。

> He worshiped Grant, he identified himself with Grant. Their lives, it now seems, became interlocked . . . . .[9]

これほどまで Twain の Grant への傾倒ぶりを Kaplan は強調した。さらに，Twain の娘 Susy は父の旺盛であった文筆活動がぴたりと止ったことを母 Livy と心配し，次のようにしたためている。

> Mama and I have both been very much troubled of late because papa, since he had been publishing General Grant's books, has seemed to forget his own books and works entirely; and the other evening, as papa and I were promenading up and down the library, he told me that he didn't expect to write but one more book, and then he was ready to give up work altogether, die, or do anything. [10]

このように，Twain の周りに居て，Twain の一挙手一投足のすべてを知り尽していた近親，親友はもとより，後の伝記研究家までも，Twain と Grant との親密な関係について均しく言及していることは，見逃せまい。とりわけ，Susy の書いた文章中の "General Grant's books" と "one more book" は，われわれの注目に値する。この "General Grant's books" とは Twain 自身，この経営者であった Charles L. Webster & Company[11] が手掛けて本にして出した *Personal Memoirs of U. S. Grant* 2巻本[12] のことであり，"one more book" とは *A Connecticut Yankee* のことを指しているからである。

この Grant 将軍の『南北戦争回顧録』に Twain は異常なまでに取り憑かれた。"I wanted the General's book . . . and I wanted it very much."[13] と後になって Twain が述懐しているのでも明らかなように，Twain が，この将軍回顧録の出版に込めた執念は凄じかった。そもそも，この本との関わり合いがともかく面白い。Twain がある講演を済ませての帰途のことだったという。2人の男が交わしていた話，つまり病魔に取り憑かれ，死を目前にした Grant 将軍が金銭に窮し，回顧録を書いて稼ぐ決意を固めてきているという話が，ふと彼の耳に入ってきた。Twain は直感的にこれに食指を動かした。時を移さず，Grant 将軍と会い，その回顧録出版を自分らに任せて欲しい，本の印税はその代り普通の3倍はずむからと，強引に頼み込んだ。そして，ついに将軍の承諾を得たというのである[14]。そして，1885年の冬，

この著者 Grant の仕事を全面的に肩代りし、Twain は，わが仕事を忘れて仕上げ，*Personal Memoirs of U. S. Grant* を発刊した。そして，この本は爆発的な人気を喚び，ベストセラーとなった。これは，Charles L. Webster & Company にとって *Huckleberry Finn* に次いでの大当りで，莫大な利益をあげた。

後の "one more book"，つまり *A Connecticut Yankee* は，この直後の1885年12月か，これから1年後の1886年3月かに書き始められている[15]。この時期がすでに触れたように *Huckleberry Finn* の発刊と近接していることに注目する必要がある。しかし，それ以上に注目すべきことと思われるのは，Twain が *A Connecticut Yankee* の創作に当った時期が，Grant 将軍の *Pesonral Memoirs of U. S. Grant* の出版に当った時期とが重なることである。

Twain は自ら，この創作への没頭ぶりを次のように述べている。

> I work seven hours a day, and am in such a taut-strung and excitable condition that everything that *can* worry me, does it; and I get up and spend from 1 o'clock till 3 A. M. pretty regularly every night, thinking—not pleasantly.[16]

この並々ならない打ち込み方からしても，*A Connecticut Yankee* が尋常の作品ではなかったことがよくわかる。まして，作品冒頭の所での Sir Thomas Malory 作 *Mort d'Arthur* をねたにした戯作品だと思いつかせるこの作品の題名も，1884年秋のノートブックでの Cable からの *Mort d'Arthur* との出合い[17]も，彼一流の煙幕であることがわかる。それは Twain 自身の次の告白にもうかがえる。

> I want relief of mind; the fun, which was abounding in the Yankee at Arthur's Court up to three days ago, has slumped into funereal seriousness, and this will not do—it will not answer at all. The very title of the book requires fun, and it must be furnished.

But it can't be done, I see, while this cloud hangs over the workshop.[18]

ここで，作者のねらい通りに進まなくて，豊かにあった "fun" がわずか3日後には "funeral seriousness" に落ち込んでしまったという。このことからでも，Twain のこの作品に込めようとした真のねらいが，遠く隔った6世紀英国の "ungentle laws and customs" 攻撃だけではなくて，すぐ身近かのアメリカでの奴隷制度にまつわる醜状暴露にあったことを示すものと考えることができる。

そして，*A Connecticut Yankee* という作品に Grant 将軍回顧録 *Personal Memoirs of U. S. Grant* からの影響が濃厚であることはまず間違いあるまい[19]。Twain は先に触れたように，Grant 将軍との親交は誰の目にも明らかだったし，さらにまた，この回顧録出版の最後の段階では Twain 自ら，この生原稿に丹念に目を通した。その上，校正の労までも進んで取ったからである。その上，出版責任者で彼の縁に繋がる Charley Webster の仕事にも立ち入って Twain は，この本の販売上の戦術にも直接，異常に力を入れたという。こういった異常なまでの Twain の熱の入れ方からして，この回顧録が発刊されて間もなく書き始められた *A Connecticut Yankee* が，ただ部分的にのみこの影響を受けているだけに止まらず，この作品こそ，"Mark Twain's personal memoirs of U. S. Grant" になっていると，考えられる。

4

A Connecticut Yankee の前数章だけを書き終えた段階にあった1886年11月16日に，Mrs. Fairbanks 宛てに手紙を出し，その中で，この小説の性格に触れて次のように書いた。

The story isn't a satire peculiarly, it is more especially a *contrast*. It merely exhibits under high lights, the daily life of the (imagi-

nary Arthurian) time & that of today; & necessarily the bringing them into this immediate juxtaposition emphasizes the salients of both. [20]

ここでは一見するところ，6世紀 Arthur 王時代の英国と19世紀文明国アメリカとのコントラストを写し出そうとしたのが *A Connecticut Yankee* だと Twain は述べているにすぎないかに思えるかもしれない。ところが，この引用の最後の "the salients of both" に注目してもらいたい。"salient" とは辞書によれば，「凸出部」で，とりわけ，「要塞・戦線・塹壕の突出点」という軍事用語として普通用いられる。言葉使いに特に気を配った Twain が，選りに選ってこの軍事用語を選んだ理由は，*A Connecticut Yankee* を南北戦争での北軍戦線屯所物語にしようと意図したことによると考える。この作品の随所に南北戦争に関わる用語が使われているだけにとどまらない。直接，"our great civil war in the nineteenthcentury" (*C.Y.*, 284) を入れて，作者は読者にかなり明瞭に南北戦争時の "salient" 物語であることを示しているからだ。

Huckleberry Finn が一見子供の物語のようだが，実は大人の物語であるという指摘は数多くの批評家によってなされた。ただこの作品が実は南北戦争回想談で，これと同時期に書かれた "A Campaign that Failed" を骨子にまとめられたロマンスだという指摘は，まだなされていない。*Huckleberry Finn* 冒頭の NOTICE の署名 "G. G." とは General Grant を指すイニシャルであることが最近になってわかった[21]。そして，Clemens 中尉の遊撃隊 "Marion Rangers" と言えば誰しも Huck の憧れる "Tom Sawyer's Gang" のことを思い出す。その挙句 Huck, Tom らの辿り着く結末は失望・解散・逃亡である。Huck は St. Petersburg, Phelps Farm の白人社会に背を向けて逃亡，西部の "territory" に向うが，Clemens も自分の生地の南部社会を尻目に脱走，ネバダという極西部の "territory" に向う。いずれも自らの属する社会に離反し，疚しい思いを胸にしながら亡命する "a rebel"[22] 同志

だということで一致する。

こう見てくると，*Huckleberry Finn* は，南軍側の "salient" 物語で，*A Connecticut Yankee* は，北軍側の "salient" 物語であるということになる。このコントラストがそのまま "The Private History of a Campaign that Failed" と *Personal Memoirs of U. S. Grant* のコントラストと重なり合うことを "A Campaign that Failed" を読んでいく内に知らされるのだ。

Twain の生まれたミズーリ州 Monroe County の Florida の近くの露営地で，Clemns の遊撃隊は，敵の某北軍旅団が自分たちを掃蕩する目的で接近中という報せを受け，失望・解散・逃亡しようということになる。

> The last camp which we fell back upon was in a hollow near the village of Florida, where I was born—in Monroe County. Here we were warned one day that a Union colonel was sweeping down on us with a whole regiment at his heel. This looked decidedly serious. Our boys went apart and consulted; then we went back and told the other companies present that the war was a disappointment to us, and we were going to disband.
>
> (*C.T.F.*, 1206)

ところが後になって，この北軍旅団を率いていた敵方の旅団長こそ，後の北軍総司令官・第18代大統領 Ulysses S. Grant，その人であったと知り，Clemens は驚くというのである。

> In time I came to know that Union colonel whose coming frightened me out of the war and crippled the Southern cause to that extent—General Grant. I came within a few hours of seeing him when he was as unknown as I was myself; at a time when anybody could have said, "Grant?—Ulysses S. Grant? I do not rememper hearing the name before." It seems difficult to realize that there was once a time when such a remark could be rationally

made; but there *was*, and I was within a few miles of the place and the occasion, too, though proceeding in the other direction. (*C.T.F.*, 1207)

Clemens はこういう非常時に Grant とほんの2，3マイル隔てて敵・味方に対峙し合っていたことを重く見て，"A Campaign that Failed" を "My Campaign against Grant"[23] と呼んだこともある。この宿命的な両雄対峙の図を Twain は片や Grant 将軍回顧録の編集・出版者として，片や己れの若き日の Clemens 中尉回想録の筆者として，巧みに立場を利用して，文学世界に取り込んだ。その結果が見事に実を結んで出現した文学的両雄対峙図[24]が，1885年ほとんど同時に公けにされた *Personal Memoirs of U. S. Grant* という『南北戦争回顧録』と，"The Private History of a Campaign that Failed" という「敵前脱走秘記」とが "twin books" として文学的対峙図をなしている。しかし，ここで「対峙」という表現は当らないかもしれない。Clemens 側と Grant 側との間には比較にならないほど大きな開きがあるからである。Grant 大佐率いる第21特別旅団数千名に対し，Clemens 中尉の率いる "Marion Rangers" は僅かに16名にすぎなかった。この大きな開きを具体的に示すために *Personal Memoirs* は実に1200頁余の大著とし，"A Campaign that Failed" の方は僅か17頁の小冊子にするという配慮が Twain の側でなされたと考えられる。

5

"The thought shot through me that I was a murderer; that & had killed a man—a man who had never done me no harm." (*C.T.F.*, 1205)

この一文こそ，"A Campaign that Failed" の中で最も重く読者の心にのしかかるものだ。Howells の書いているように，Twain は誰よりも正邪・理

非曲直・偽善・不公正に激しい憤りをぶちまけた作家であっただけに，"I was a murderer." という自らの忌まわしい過去は Twain の場合，生涯拭い切れなかったと見ていい。生死を分ける戦争という非常事態にあったとはいえ，また，他の戦友と同じ発射し，自分の一弾が命中していないかもしれないと口実がある[25]にもせよ，何にも自分に害を与えたことのない青年の生命を奪ったことは Twain にとって正に痛痕の極みであったろう。"The thought of him got to preying upon me every night; I could not get rid of it." (*C.T.F.*, 1205) と書き添えていることでも明らかだ。

Twain にはまたその上に痛痕事が重ねられた。それは，南軍の旗の下で戦っていた戦友たちを見殺しにして敵前脱走を敢行したこと，そればかりか南部を裏切り，敵方の Lincoln 大統領のいわば手先としてネバダに赴いたこと，さらにはアメリカ合衆国存立を賭け，双方が死闘中であるという時に，喃々と金銀鉱漁りをして自堕落な生活を送っていたこと，という数々の罪である。臆病者，卑劣漢，売国奴，拝金盲者という恥ずべき汚名が，先の「人殺し」の汚名の上に重ねられた。これほどまでに忌まわしい過去を払拭するために Twain は，できるだけ旅に出た．それもできるだけ遠く離れた外国に出向くことを心掛けたのではと思われる。そして，ペンの力で何とかこの古傷を癒そうとした。それでも，"Samuel Clemens" という悪に汚れ，罪の染む名では書けない。そこで Twain は数々の匿名，たとえば "Blab", "Thomas Jefferson", "Quintus Curtis Snodgrass", を用いたし，また，"Moralist of the Main", "Wild Humorist of the Pacific Slop", "Washoe Wit" などの長たらしい変名も使った[26]。そうこうして最後に定着したのが "Mark Twain" であった。そして，私的な手紙などでも彼は，本名 Samuel Clemens よりも，他の "Prodigal Son", "Sinner" といった別名も使った。つまり，本名を避け，ニックネイムに逃げたのだった。

J. D. Kaplan は，Twain の1890年代後期のノートブックに，"S. L. C. intezviews M. T." という表現が目立つことを指摘している[27]．この自己を

2分して，"S. L. C." と "M. T." にしたことは，思うに，Clemens が自分に重くのしかかった南軍脱走兵としての自責の念を少しでも軽くしようと，折りにふれ，彼の persona, Mark Twain, に自らの罪の告白をしていたことを表わしている。こういう仮定に立つならば，Clemens が「いとも小さきもの」"the infinitely little", Huck によって演じられ，"the typical hero of the great Civil War" の Grant が，「いとも大いなるもの」"the infinitely grand",[28] Boss Hank によって演じられ，*Huckleberry Finn* と *A Connecticut Yankee* 両作品の見事なコントラストがわれわれの前に提示されていると言えるだろう。

6

以上，述べてきたように，1885年にまるで2頭の軍馬が轡を並べるように，"The Private History of a Campaign that Failed" と *Personal Memoirs of U. S. Grant* とが世に出た。そして，この両作品対峙図が言わば下敷きになって，*Huckleberry Finn* と *A Connecticut Yankee* との両大作対峙図をなして世に出た。これら2つの対峙図の完成で，Twain が40年以上にわたって燻りつづけた内なる葛藤，"outer self" の作家 Twain と，"inner self" の人間 Clemens との葛藤，が一応終結したと見てよかろう。1885年まで，Twain がいやに執着しているかに見えた "rebel" タイプから，1889年の *A Connecticut Yankee* でやっと脱却できて，"hero" タイプを取り上げられる所まで漕ぎつけられたからだ。ここに来てようやく Twain は，"I was a *soldier* for two weeks once in the beginning of the war, and was hunted like a rat the whole time"[29] という惨めな脱走兵 Clemens 中尉の過去から解放された。そして，Twain の作家としてよりも人間としての真実を遺憾なくぶちまけたいという宿願が適えられる所にまで，遂に辿りついたと思われる。

For several years I have been intending to stop writing for print

as soon as I could afford it. At last I can afford it, and have put the pot-boiler pen away. What I have been wanting is a chance to write a book without reserves —a book which should take account of no one's feelings, and no one's prejudices, opinions, beliefs, hopes, illusions, delusions; a book which should say my say right out of my heart, in the plainest language and without a limitation of any sort. I judged that that would be an unimaginable luxury, heaven on earth.[30]

ここでの "an unimaginable luxury, heaven on earth" とは Twain 本来の "an indignant sense of right and wrong"[31] を存分に爆発させれることを意味している。それは Twain なりの意味での死の克服である。次に引用するのは, Twain の詩の一つ, "Apostrophe to Death" である。ここに彼特有の死の克服が鮮やかに歌い出されている。

O Death, the only kind & dear & generous!
Sole of all the gods of all the heavens
That dost not keep a trader's shop & peddle benefits;
Whose unbought mercy is for all alike; whose pity & whose peace
Go free to all, unsmirched by bargain-taint;
Whose gentle refuge standeth wide
To all that weary are: the soiled, the pure,
The rich, the poor, the unloved & the loved!
Who barreth none; who saith to all,
"My peace I *give* to thee"— not sell!
"Enter thou in, & rest."
O Death, O sweet & gracious friend,
I bare my smitten head to Thee, & at thy sacred feet
I set my life's extinguished lamp & lay my bruisèd heart.
I worship thee, & thee alone;

I lay my bruisèd heart. I worship thee, & thee alone;
Would kneel to thee, were't meet to offer, where one loves,
The attitude that shames both him that kneels & him that suffers it.[32]

ここに Twain が生涯を通じて探求しつづけた再生の境地が込められている。これをさらに押し進め，Twain ならでわの諦観の境地は

"the man is dead; but not exactly that . . . even in poetry it does not mean that life has ceased; it has departed—that is all; we do not know its new habitat, but we know it is still with us . . . Nothing will be lost, nothing will perish."[33]

で遺憾なく尽されている。1910年3月，Twain は死を真近かにして娘 Clara に宛てて，

"Yesterday, I read 'A Connecticut Yankee at King Arthur's Court' for the first time in more than 30 years. I am prodigiously pleased with it—a most gratifying surprise.[34]

と書き送っていることに注目したい。この遺言とも言える自作評価は，誰よりも自らが "A *Connecticut Yankee* is in some ways the most American of Mark Twain's books"[35] と認めたことを示すからだ。それにひきかえ，*Huckleberry Finn* についての Twain の評価は意外に低かった。このことは Twain の作家真情が "A Campaign that Failed" の別の呼称，"An Author's soldiering" 「文筆家従軍記」[36] 記者のそれであったことを示すと言えるかもしれない。

注

この小論の発想は主として Harold Beaver 著 *Huckleberry Finn* (London: Allen & Unwin, 1987) によって触発されたものである。

1 M. Twain, *A Connecticut Yankee at King Arthur's Court* (Penguin Books, 1971).

この書からの引用はすべて，その末尾に略記し，(*C. Y.*, 頁数) のように表わす。

2 M. Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Berkeley: University of California Press, 1985)。この書からの引用はすべて，その末尾に略記し，(*H. F.*, 頁数) のように表わす。

3 H. G. Baetzhold, "The Course of Composition of *A Connecticut Yankee*," *American Literature*, Vol. 33, No. 2 (May, 1961), pp. 195–214. この時期については諸説がある。

4 H. N. Smith & W. M. Gibson, eds., *Mark Twain-Howells Letters* (Cambridge Harvard Univ. Press, 1960), p. 595.

5 L. Teacher, *The Unabridged Mark Twain* (Philadelphia: Running Press, 1976) この書からの引用はすべて，その末尾に略記し，(*C. T. F.*, 頁数) のように表わす。このパンフレットは，1885年に Century Magazine に載り，1892年には *Merry Tales* に収められ，Charles L. Webster & Company から出た。

6 W. Whitman, "Specimen Days Collect," *Complete Poems and Prose of Whitman* (Philadelphia: 1888), pp. 80–81.

7 A. B. Paine, ed. *Mark Twain's Notebook* (New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1972), p. 180. ここに，"Thrice have I been down in the valley of death, and now I have come up." という Grant 自身の死の克服の言葉がある。

8 E. C. Salsbury, *Susy and Mark Twain* (New York: Harper & Row, 1965), p. 185.

9 J. Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain* (New york: Simon & Schuster, 1966), p. 225.

10 A. B. Paine, *Mark Twain: A Biography* (New york, 1912), II, p. 840.

11 Twain の甥 Charles L. Webster と共同で Twain が出版と経営の責任を担っていた出版会社。この会社が最初に手掛け，成功した処女出版書は *Huckleberry Finn*. 従って，*Personal Memoirs of U. S. Grant* は第2番目に手掛けるもの。このことについては A. B. Paine., ed., *Mark Twain's Notebook*, Chap. XVIII を見よ。

12 U. S. Grant, *Personal Memoirs of U. S. Grant* (New york: Charles L. Webster & Company, 1885) Ⅰ，Ⅱのこと。大部分なもので，1200頁余にのぼる。

13 J. Kaplan, p. 261. Twain の出版者としての言葉。

14 *Ibid.*, この事件について Kaplan は次のように Twain 自身の述懐を引いて説明している。

Dictating his autobiography in 1906, Clemens provided the event with the the atmosphere of a Poe story:

I had been lecturing in Chickering Hall and was walking homeward.

It was a rainy night and but few people were about. In the midst of a black gulf between lamps, two dim figures stepped out of a doorway and moved along in front of me. I heard one of them say, "Do you know General Grant has actually determined to write his memoirs and publish them? He has said so today, in so many words." That was all I heard—just those words—and I I thought it great good luck that I was permitted to overhear them.

15 この時期については正確には未だ明らかにされていない。ただ A. B. Paine, ed. *Mark Twain's Letters* (New York: Harper & Brothers, 1935) に次のように書かれているにすぎない。

Mark Twain that year was working pretty steadily on *The Yankee at King Arthur's Court*, a book which he had begun two years before. He had published nothing since the *Huck Finn* story, and his company was badly in need of a new book by an author of distinction. Also it was highly desirable to earn money for himself; wherefore he set to work to finish the *Yankee* story. He had worked pretty steadily that summer in his Elmira study, but on his return to Hartford found a good deal of confusion in the house, so went over to Twichell's, where carpenter work was in progress. He seems to have worked there successfully, though what improvement of conditions he found in that numerous, lively household, over those at home it would be difficult to say.

16 A. B. Paine, ed.. *Mark Twain's Notebook*, p. 177.

17 この影響については，この書の題名からも明らかだが，Twain のノートブックに次のように書かれている。

"Fall of '84—while Cable & I were giving readings Cable got a Morte d'Arthur & gave it me to read. I began to make notes in my head for a book Nov. 11, '86 I read the first chapter (all that was then written), at Governor's Island & closed the reading with an outline of the probable contents of the future book (The Yankee at Arthur's Court in '87 & '88, published it in December '89 . . . Nov. 19 '89 SLC" (NOTEBOOK #23,11)

その影響度については次の論文が詳しい。

R. H. Wilson, "Malory in *The Connecticut Yankee*" *University of Texas Studies In English*, Volume 27:1 (June, 1948).

A. B. Paine によると，Cable によって手渡された T. Malory の *The Morte d'Arthur* は，"little green cloth-book" で，Strachey の "Glove" edition だった

という。

18 A. B. Paine ed., *Mark Twain's Notebook*, p. 177.

19 A. B. Paine, ed. *Mark Twain's Notebook* (p. 177) によれば，Twain の娘 Susy がこの時期の Twain の Grant 将軍回顧録への熱中振りについての記述を引用して紹介している。

He did, in fact, engage a stenographer at this time and begin the dictation of autobiography. He could not keep it up, however, not then. He was too busy, and he was not used to dictation. He dictated the story of the Grant book—that being the freshest and most important thing in his mind—then laid work aside for about twenty years, during which period he made no more than brief attempts to set down his memories.

また，この Notebook は，Twain がこの回顧録のことで，1885年2月21日から始始めて Grant 将軍宅を数度にわたって訪ね，彼の最後の訪問も将軍の死の2週間前，同年7月1日，2日であったことを明らかにしている。尚，同年8月8日，彼が将軍の厳かな葬列も見送ったことも記している。因みに，Grant は，1885年7月23日に死亡した。この死についても Twain はこの Notebook に書き留めている。

20 D. Wecter, ed. *Mark Twain To Mrs. Fairbanks* (San Marino: Huntington Library, 1949), p.p. 257-8.

21 M. P. Hearn, ed., *The Annotated Huckleberry Finn* (New York: Clarkton N. Potter, Inc., 1981) で次の注がある。

G. G. Apparently General Ulysses S. Grant (1822-1885), commander of the Union Army during the Civil War and former President of the United States whose memoirs Twain was then arranging for publication.

22 この "a rebel" および，これに類するの呼称は数限りなく Twain の場合，見出せる。

23 J. Kaplan, p. 277. このパンフレットの仮称として Twain が用いた。

24 この対時図の発想は，筆者のもの。ただし，Kaplan (p. 271) の言う，Charles L. Webster & Company 書簡紙頭部に "Mark Twain's Books and the forthcoming *Personal Memoirs of General Grant*" と並べて印刷するようにと，Twain が指示したことなどに触発されたことだけはここで断っておく。

25 "A Campaign that Failed" に，この口実が次のように記されている。

It soon came out that mine was not the only shot fired; there were five others—a division of the guilt which was a great relief to me, since it in some degree lightened and diminished the burden I was carrying. There

were six shots fired at once; but I was not in my right mind at the time, and my heated imagination had magnified my one shot into a volley.

26 これらの変名をさんざん使って最後に定着した変名. "Mark Twain" について, J. M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1966) p. 196. で, Cox は次のように述べている。

The discovery of "Mark Twain" in the Nevada Territory in 1863, while it had been Samuel Clemens' discovery of his genius, had quite literally been a way of escaping the Civil War past which lay behind him in Missouri. In effect, the humorous identity and personality of "Mark Twain" was a grand evasion of the Civil War.

また, Twain の変名については, Paul Fatout. "Mark Twain's Nom de Plume," *American Literature*, Vol. 34, No. 1 (March 1962), pp. 1-7. が詳しい。

27 J. Kaplan, p. 340.

28 A. B. Paine, ed. *Mark Twain's Notebook* (p. 177) に, この表現がある。Twain は一般に英雄嫌いとして知られているが, Twain が尊敬した数少ない英雄の一人に, Grant を加えていることに注意。

Club Essay: The little man concealed in the big man. The combination of the human and the god. Victor Hugo; Carlyle; Napoleon; Mirbel; Jesus; Emerson and Washington, with a parenthesis enclosing a question mark after Washington; Grant; Mahomet—in them (including the Saviour) was allied the infinitely grand and the infinitely little. Carlyle, whose life was one long stomach-ache, and one ceaseless wail over it. Gladstone—and out of courtesy to many here present, I add Blaine—Macaulay—Shakespeare—Burns—Scott—Richelieu—Cromwell—.

29 A. B. Paine, ed., *Mark Twain: A Biography* (New York: Harper & Brothers, 1930), p.p. 915-916.

30 H. N. Smith, & W. M. Gibson, ed. *Mark Twain-Howells Letters*, p. 610-611.

31 W. D. Howells, *Century Magazine* (September, 1882) の中で, Howells がの読者に発した警告。

I warn the reader that if he leaves out of the account an indignant sense of right and wrong, a scorn of all affectation and pretense, an ardent hate of meanness and injustice, he will come infinitely short of knowing of knowing Mark Twain.

32 A. L. Scott, *On the Poetry of Mark Twain* (London: Univ. of Illinois Press,

1966), p. 127.

33 J. S. Tuckey, *Mark Twain's Which Was The Dream* (Berkeley: University of California Press, 1967), p. 457.

34 C. Clemens, *My Father, Mark Twain* (New York: Harper & Brothers, 1931), p. 289.

35 H. S. Canby, *Turn West, Turn East* (Boston: Houghton Mifflin, 1951), p. 170.

36 L. Teacher, p. 1192.

Synopsis

Huck and Hank —The Rebel and the Hero in "A Campaign that Failed"

Yorimasa Nasu

"The Private History of a Campaign that Failed" and *Personal Memoirs of U. S. Grant* were issued in the same year, 1885, by the same person named Mark Twain. Twain made every effort to bring out the Grant book as its publisher, and at the same time, made every effort to finish writing the war paper with a view to putting it out so that 1885 might find the two works coming abreast. Why was Twain so strenuously absorbed in bringing out them in the form of twin works?

"The thoughtful will not throw this war paper of mine lightly aside as being valueless," Mark Twain asserts in the closing paragraph of "The Private History of a Campaign that Failed." This remark alludes to something important and unknowable kept deeply in his mind. I believe, it is Clemens's remorse as "a rabbit" for doing nothing but "retreating" in the Civil War. The man who frightened him out of the war as he came to know later, was General Grant, the most brilliant "soldier" in the war. This remarkable contrast is burlesquely exposed not only at the beginning of the war paper but at the end of it. The contrast is that of "the infinitely little" Clemens and "the

infinitely grand" Grant. In it, the Confederate army lieutenant Clemens introduces himself as, "I was a rebel . . . I had killed a man—a man who had never done me any harm," and on the other hand, the Union colonel Grant is celebrated as "the typical hero of the great Civil War."

"A Campaign that Failed" makes clear the fateful confrontation of 1861 of Clemens and Grant in the Civil War, near the village of Florida, Missouri. This confrontation of the Clemens's "Marion Rangers" consisting of only 15 "rabbits" and the whole Union regiment under the command of Colonel Grant is well pictured by the nearly simultaneous publication of the small paper of 17 pages, "A Campaign that Failed" and the big books of two volumes, *Personal Memoirs of U. S. Grant.* This contrasting book-size reemphasizes the scene of Clemens, "the infinitely little", facing Grant, "the infinitely grand."

This view sheds light upon many problems of Twain's works, especially the relation between *Adventures of Huckleberry Finn* and *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court.* The main target for severe criticism in the two serial books is "ungentle customs and laws," especially slavery. This is the only point in common; on all other points, they are completely different. Consider Huck's and Hank's attitude towards death or the dead. Huck wishes to enjoy life in the world without death or the dead, as he says, "I don't take no stock in dead people," in Chapter 1; and in Chapter 9, "I didn't look at him (a dead man) at all . . . I didn't want to see him." On the other hand. Hank is so brave and tough that he thinks little of death; he gives such order as "We will kill them all," in Chapter 43; and in the last chapter, he dares to say, "death is nothing, let it come." And

Huck's and Hank's ways of fighting are completely different; Huck is very proficient in "retreating", that is "lighting out," while Hank hates to retreat, and willing to march forward to the front. From this point of view, it may be clear that Huck resembles Clemens, "the infinitely little" in the Civil War, while Hank is just like Grant, "the infinitely grand."

Justin Kaplan says in his *Mr. Clemens and Mark Twain*, "He (Twain) worshiped Grant, he identified himself with Grant." I believe, Kaplan is right. Twain creates Hank as a Grant-image character, and sends him into 6 th century England which easily reminds us of the South. And Twain returns to the old damnable days in the Civil War time, and dares to send his inner self, Clemens, into *Huckleberry Finn*, which is not "made by Mr. Mark Twain." The dramatic event of the rebel facing the hero in the Civil War battleground, I believe, was deeply engraved in Twain's mind. One of the evidences is that Twain wrote Clara, his daughter, only six weeks before his death, "I am prodigiously pleased with it (*A Connecticut Yankee*)—a most gratifying surprise."